

この記事は Una Voce France のホームページに掲載された記事の翻訳です。記事の URL は下記です。

<http://www.unavoce.fr/content/view/61/60/>

聖霊降臨後第7主日のミサ

固有唱解説

2012年7月15日(日)、2級、緑

(原文冒頭の版画の解説)

マヨルカ出身のスペイン人、ジェロニモ・ナダル(1507~1580)はイエズス会の最初の10名の会員の一人でした。彼は何年にもわたって会の創立者聖イグナチオ・デ・ロヨラ(1491~1556)の私的代理人あるいは「特使」として全ヨーロッパのイエズス会修道院を訪問しては、イエズス会の会則を解説し実践させるという役目を果たしました。聖イグナチオ自身が、「霊操」の伝統に則って、聖書の黙想の祈りのための挿絵入り手引書をまとめ、配布するようナダルに勧めました。ナダルは聖書の場面を選び、各場面に合わせて註解を付けました。アントワープの出版者クリストフ・プランタンとマルティヌス・ヌティウスの協力と支持により、153作の版画が制作されました。1593年にこれらの挿絵版画は、" *Evangelicae Historiae Imagines* " (福音書物語図版集) という書名で、イエズス様の生涯と司祭職を時間軸に沿って配置し、一冊に纏めて出版されました。

-Una Voce France では、現行の典礼暦に沿って、待降節第1主日以降のすべての放送を皆様に提供することに致しました。トップページ上部のオレンジ色の帯の" *Chants de la messe* "の項目をクリックし、プルダウンメニューからご覧になりたい典礼暦上の時期を選択してください。サイトの訪問者数カウンターによれば、当サイトの利用者は多数にのぼり、神の賛美がこのようにして輝き渡ることを私たちも喜ばしく思っております。しかしながら、私どもとしても出費は避けがたく(CD、オーディオ機器、パソコン関連機器の購入費など)、皆様のご寄付をお待ちしていることをご理解ください。

- Introibo というサイトでは、ドン・ゲランジェ、ドン・バロン、ドン・シユステールの興味深い註解が閲覧できます。

<http://www.introibo.fr/7eme-dimanche-apres-la-Pentecote>

-このミサの典礼文全文は、貴重な資料と共に、当協会のスイスの友人である APFEL（典礼の特別形式推進協会）のホームページで閲覧できます。

<http://www.summorum.ch/AnneeLiturgique/07-07Pentecote.html>

-固有唱の楽譜がない方は、*Sancta Missa* のサイトをご覧ください。

http://www.sanctamissa.org/en/music/gregorian-chant/chant-liturgical-year/trid_dVIIpostPentecosten.html

-ミサ当日に先立つ月曜以降、このサイトでも放送をお聞きになれます。下記のカーソルの左の小さな三角形をクリックしてください。典礼的にも霊的にも、そして発声の間からも主日のミサの良い準備となります。

では放送をお楽しみ下さい。 *Ut in ómnibus glorificétur Deus...*

(Una Voce France のホームページではここに視聴用のカーソルがあります。)

聖霊降臨後第7主日のミサはかなり独自の性格を備えています。このミサは古いローマ典礼書には見当たらないところから、ガリア教会に由来するものと思われる。ただし、ここで言うガリア式とは17世紀のガリカニスム^(訳註1)や、ローマから独立した国教会として自らを任ずるフランス教会の思い上がった自負のことではなく、未だ典礼の統一がなされていなかったカロリング王朝時代以前のガリア地方^(訳註2)の教会の典礼のことで、当時はまだローマ聖歌（グレゴリオ聖歌の原型）、アンブロジオ聖歌（ミラノ）、ベネヴェント聖歌、イスパニア聖歌、ガリア聖歌が併存していました。ローマ典礼が西方のキリスト教世界全体に採用されたのはようやく8世紀になって、小ピピン^(訳註3)とカール大帝^(訳註4)の治世下のことでしたが、ローマ典礼には本日のミサがその一例であるように、ある程度までガリア典礼の要素が取り入れられました。その痕跡はたつぷりと引き延ばされるアレルヤ唱のメロディに顕著に見られます。同様に、奉献唱は長々と展開する祈りですが、それに対して入祭唱、昇階唱、拝領唱はとても簡素で、グレゴリオ聖歌集全体の中でも最も短い部類に属します。

入祭唱： *Omnes géntes*

とても短い入祭唱ととても長いアレルヤ唱の歌詞は同じで、これはとても珍

しいことです。(同様の例は一件のみで、それは御降誕祭の真夜中のミサです。) 詩編 46 の最初の章句が使われていますが、これはシオンの丘に契約の櫃が上げられた時の勝利の歓呼で、主がご自分の民にお与えくださった大勝利に感謝するためのものです。この詩編はすでに主の御昇天の祝日に使われていました。そこでは契約の櫃が上げられたことが主の御昇天を先取りする象徴となっていました。

目下の聖霊降臨後の時節、これまでの主日の聖歌で表現されてきた神への信頼、神の御意志に自らを委ねる思い、御保護を求める祈りといった諸々の想いの後、本日のミサではキリスト教徒にとって根本的なもうひとつ別の態度を見出します。その態度はまた次週のミサの中にも見出されるもので、それは神の威厳と全能への賛美であり、神の善き業への感謝です。

Omnes gentes, plaudite manibus, jubilate Deo in voce exsultationis.

すべての民よ、手を打ち鳴らせ。喜びの声をあげて神に叫べ。

神へのこの賛美は手と声でなされるべきだということに注意しましょう。つまり言葉と同様、行いによってもなされるべきだということに。

Quoniam Dominus excelsus, terribilis, rex magnus super omnem terram.

なぜなら主はいと高き、畏るべきお方、全地に君臨される偉大な王。

先に述べたようにこの入祭唱はとても短く、大変簡素なメロディは軽やかで喜びに満ちています。

昇階唱：*Venite filii*

聖霊降臨後第7主日のミサのその他の聖歌とは異なり、この昇階唱は古いローマ典礼書に掲載されていますが、そこでは「大投票の週日」と呼ばれる四旬節第4週の水曜日の昇階唱でした。この呼び名は復活徹夜祭に受洗する洗礼志願者をこの日に指名したことに由来しています。そして当時のローマ典礼書ではこの昇階唱が本日のミサのために再び掲載されています。従って、この歌詞が語りかけている相手はまず未来の受洗者です。歌詞はダビデの作とされている賛美と感謝の賛歌の詩編 33 を下敷きにしていて、この詩編は目下の聖霊降臨

後の時期、この先、何度も登場することになります。ここで結び合わされている2つの章句は詩編の中では繋がってはいませんが、素晴らしく互いを補い合っています。

Venite filii, audite me: timorem Domini docebo vos. Accedite ad eum, et illuminamini: et facies vestrae non confundentur.

子らよ、来て、私に聞け。主を畏れることを教えよう。主に近づけば光に照らされ、恥じて顔を赤らめることはない。

新たな受洗者へのこの招きは今日、私たち全員に語りかけられます。この言葉の中で霊的生活の2つの大きな段階がひとつになっているのに気づきます。すなわち、聖霊の賜物のうちの最初のものである神への恐れ、これによって私たちは遜って神の威厳の御前に跪き、また光こそ無限の美と善であるお方を私たちに知らせ、観想させ、抗いがたい力でそのお方の許へと惹き寄せてくれるものです。

入祭唱の *Omnes gentes* と同様、この昇階唱はとても短いですが、そのメロディは、数あるその他の昇階唱と同様の表現法を用いているものの、歌詞に含まれる豊かさを見事に表現しています。中でもとりわけ *decebo vos* の歌詞の部分の低音部への下降が神の威厳を前にしての深い崇拝を表し、反対に *accedite ad eum* の歌詞の部分で徐々に最高音へと移行していく長いヴォカリーズ（母音を長く延ばす唱法）が、いつかそこで神の威光を観想することができる、天に惹かれる想いを表していることに注目いたしましょう。

アレルヤ唱 : *Omnes gentes*

すでに述べたように、聖霊降臨後第7主日のアレルヤ唱の歌詞は、入祭唱と同じ詩編46で、神の威厳と全能への歓呼を表しています。

Omnes gentes, plaudite manibus, jubilate Deo in voce exsultationis.

すべての民よ、手を打ち鳴らせ。喜びの声をあげて神に叫べ。

しかし入祭唱がとても短く、簡素で軽やかな喜びに満ちたメロディによってこの歓呼の声を響かせているのに対し、アレルヤ唱はとても長く、長いヴォカリー

ーズや数多くの転調のある雄大で厳かなメロディによって、ゆっくりと時間をかけて、神とその業の壮麗さをことごとく、その広大さと多様性において賞賛しています。ここでは、グレゴリオ聖歌のメロディが、同一の歌詞にどれほどまでに異なる表現を付与することができるかを見ることができます。

奉献唱：*Sicut in holocausto*

これまでの主日の全ての聖歌の歌詞は詩編から引用されてきました。聖霊降臨後第7主日のミサの奉献唱は、この時期の典礼で今後のいくつもの長い奉献唱に見られるように、旧約聖書の他の書から引用されています。今回の書は預言者ダニエルのもので、さらに正確に言うなら、ネブカドネツアル王によって炉に投げ込まれたものの、神に素晴らしい祈りを捧げた後、奇跡的に炎を免れた3人のユダヤ人の若者の逸話に基づいています。この祈りは典礼でしばしば用いられるもので、この祈りによって彼らは自分たちの民の救いのための犠牲を捧げるのです。

Sicut in holocausto arietum et taurorum, et sicut in millibus agnorum pinguium, sic fiat sacrificium nostrum in conspectu tuo hodie ut placeat tibi, quia non est confusio confidentibus in te Domine.

雄羊と雄牛の燔祭のように、また何千もの肥えた子羊（の燔祭）のように、今日、御前で私たちの犠牲が全うされ、御心に適うものとしてください。なぜなら主よ、あなたに信頼を於く者は、そのことを恥じることなどないからです。

この歌詞の一部の2つめの文は、ミサの奉献文において司祭が唱える祈りの中に登場することにお気づきでしょう。この祈りは今日、聖歌隊がこの歌詞を歌うまさにその時、唱えられる祈りです。旧約聖書の犠牲、中でもとりわけ3人の若者が自分たちの民に捧げる覚悟をしていた犠牲は、祭壇上で捧げられるキリストの犠牲の象りです。この奉献唱のメロディはとても慎ましく始まり、やがて繰り返されるモチーフにより懇願の調子を帯びて、徐々に高まっていきます。その後、*in conspectu tuo*の歌詞のところで突然、大きな飛躍をとげ、その後安堵に満ちていきます。さらに何度も繰り返されるモチーフと、最後まで続く装飾音の連なりが印象的です。

拝領唱 : *Inclina aurem tuam*

聖霊降臨後第7主日の拝領唱は、この日のミサの入祭唱や昇階唱と同じく、とても短いもので、おそらくグレゴリオ聖歌集全体の中でも最も短いのではないのでしょうか。この拝領唱の歌詞は、すでにその前の週にアレリヤ唱の後半の歌詞として歌われたもので、詩編30から引用されています。

Inclina aurem tuam, accelera ut eruas nos.

耳を傾け、急いで私たちを救い出してください。

しかし、ちょっとした違いがあります。それは、この拝領唱の歌詞では「私をお救い下さい。(erue me)」のかわりに「私たちをお救い下さい。(eruas nos)」という複数形になっている点です。個人的な祈りが集合体の祈りとなっているのです。主に信頼し、請い願っているのは神の民全員、教会全体なのです。この聖歌は大変短いにも拘わらず、2つの文を含んでおり、メロディもアンティフォナの小品といった類いのもではありません。ほとんど展開のないメロディですが、十分に装飾が施され表現力豊かで、穏やかで瞑想的な雰囲気醸し出しています。

訳註1 フランスのカトリック教会をローマの直接支配から独立させようという運動。

訳註2 古代ローマ時代のガリア地方は、現在のフランス、ベルギー、北イタリアを含む地域。

訳註3 ピピン3世(714~768)のこと。カロリング王朝を開いた。

訳註4 フランク王国の国王(742~814)。ピピン3世の子。